

報告要旨

第一報告 (13 : 30-15 : 15)

ジョン・ロックの聖書解釈の同時代的な意味について

—『キリスト教の合理性』の分析を中心に— 武井 敬亮 (京都大学経済学研究科)

ロックは、初期の『世俗権力二論』(1661-2年)において、内面と外面の区別を導入し、信仰と行為を切り離すことによって、良心の自由の確保と政治的な服従の両立を主張する。この議論は、紆余曲折を経て、『寛容書簡』(1689年)の中で、「政教分離」思想として展開される。しかし、ロックが晩年に執筆した『キリスト教の合理性』(1695年)では、むしろ、信仰(内面)と行い(外面)を結び付けるかたちで議論が行われている。

ロック研究においては、従来、同著作は『人間知性論』(特に理性と啓示に関する議論)と関連付けられて、道徳の基礎付けの問題を中心に議論される傾向にあった。また、歴史的な文脈を重視する最近の研究では、同著作が執筆された背景(三位一体論争や義認論争)に注目して、ロックの教義的な立場を明らかにしようとするものが多い。

本報告では、ロックが同著作を執筆した文脈を念頭に置きつつも、(報告者がロックの聖書解釈の特徴と考える)内面と外面(宗教と徳)を一致させる議論が、同時代的にどのような意味をもっていたのかを明らかにしたい。そのために、テキストの内在的な分析に加えて、出版直後に Richard Willis や John Edwards らから同著作に寄せられた批判とそれに対するロックの応答を検討する。また、こうした同時代人とのやり取りを検討することによって、ロックがこの著作を執筆・出版した意図に迫りたい。

第二報告 (15 : 30-17 : 15)

17世紀スコットランドの二つの革命—研究史整理のための試論

富田 理恵 (東海学院大学)

報告者は「17世紀スコットランドの二つの革命」と題する博士論文を準備中である。この論文の学問的な位置づけを明確にするため、研究史の整理は欠かせない。今回の報告はそのための試論を提示する。17世紀スコットランドの二つの革命とは何か。それは、1637年から1651年までの契約派革命と、イングランドの名誉革命を契機とする1688-90年の革命を指す。ブリテンでの17世紀スコットランド史研究は、「ブリテン史観」と「三王国戦争」概念の登場によって、刺激を受けたとはいえ着手されたばかりの状況である。二つの革命の間に挟まっているスコットランドの王政復古期が、専制的支配と狂信的な抵抗運動の時代とみなされて研究が進まなかったことも、17世紀の革命を統合的に理解する妨げとなっていた。しかしその状況に風穴を開ける王政復古期の研究も出始めた。これを踏まえ、本試論では、①博士論文の時期をテーマとし、報告者が『イギリス史研究入門』17世紀スコットランド史のページ執筆後に出版された注目すべき研究のあらまし ②二つの革命のどちらかが重要であると論じるべきなのか、二つを連続的にとらえ一つの革命とみなすべきか。③モリルの研究以降、すなわち王政復古期、名誉革命期の三王国の相互関係の中のスウェーデンについてなどを論点とする予定である。